

# 『忘れえぬ人々』の原像と

## その後の独歩の方法

北野 昭彦

### I 研究史上における問題点の中から

国木田独歩の『忘れえぬ人々』(明31・4『国民之友』)は、作者の「人生把握の方式」<sup>(1)</sup>と、その方式によって捉えられた人生断面図の一端を見せてくれる。いわば「独歩の小説創作の方法論」<sup>(2)</sup>と、後の彼の諸作に描かれる「小民」のモデル的原像とを同時に示した作品である。まず、後の論述の便宜上、この作品の各場面を次のように区切ってみる。

(一) 発端——多摩川畔の宿場の光景、亀屋とその主人の描写、亀屋に偶然同宿した無名の文学者大津と画家秋山との対話が、「忘れえぬ人々」の話題に至るまでの叙述

(二) 展開——大津の語る「忘れえぬ人々」の個別的再現と、忘れえぬ理由の集約的叙述

④ 第一話——瀬戸内海の小島の漁夫の姿

『忘れえぬ人々』の原像とその後の独歩の方法

⑥ 第二話——阿蘇山麓の村の馬子の姿

⑦ 第三話——四国三津ヶ浜の琵琶僧の姿——および第四話以下、描写を省いた列記(北海道歌志内の鮎夫、大連湾頭の青年漁夫、番匠川の瘤ある舟子など)

⑧ その人々を大津が忘れぬ理由——おのれ一個の利害や名利競争の囚われから解放された心の自由・愛他的共感・一切無差別平等・自他一体の同胞意識から生ずる人懐かしさと共に想起されること

(三) 結末——二年後、大津が「忘れえぬ人々」の最後に亀屋の主人を書き加えたこと

このうち、(一)の①が「独歩の小説創作の方法論」にあたる部分であり、④⑥⑦はその方法で捉えた人生断面図、つまり「小民」の原像を示す部分である。かつて吉江喬松は、

「忘れえぬ人々」は、ただにこの初期の彼の作品の態度を示すばかりでなく、彼の全作品に通じての独歩の態度を示して

あるものである。(中略)その意味で、彼は演繹的な作家である。<sup>(3)</sup>

と論じた。以来、これをふまえた多くの『忘れえぬ人々』論が出た。中には「それらの人物の内容を具体的に充たすのが大津弁二郎、すなわち小説家独歩の次の仕事でなければならぬ。『忘れえぬ人々』は、独歩の人間探究の序章である」という異説もあるが、多くの論は吉江説の延長線上に構築されている。

すなわち「『忘れえぬ人々』は彼の作品のすべてをコンデンス<sup>(5)</sup>している。「後の作品のほとんどすべてを包みこんでしまうような大きな問題——いわば民衆・社会に対する知識人とその個我の在り方についての、独歩における重大な屈折点が含まれている」<sup>(6)</sup>。「独歩の小説の主人公である山林海浜の小民たち、都会の下積みの人間たちに寄せる、独歩の限りない連帯感・愛情がどこから生まれたものか、この小説はその秘密を明らかにしている」<sup>(7)</sup>。「独歩の小説創作の方法論」である。「独歩の全作品は独歩にとってそれぞれ『忘れえぬ人々』の記念写真であり、墓碑銘だ」というのが、多くの論の集約的な概要である。

私は以上の諸説を全面否定するのではない。が、そうした所説の延長線上で独歩を論じようとすると、どうしても次の二つの疑問もしくは矛盾に逢着せざるをえないのである。

第一点は、『忘れえぬ人々』におけるA)C)の人生断面図は、『此等の人々を見た時の周囲の光景』という空間的ひろがりの中で捉えられていても、その空間が社会として現実化されていず、

社会的関連の追求に及んでいない。これが「独歩の小説創作の方法論」と独歩文学の「小民」の原像だとすれば、独歩が『二少女』『牛肉と馬鈴薯』『富岡先生』『酒中日記』『号外』『窮死』『竹の木戸』等で、「小民」を社会的状況の中で捉えて描出し、現実批判や辛辣な社会諷刺を見せている事実との矛盾を、どう説明するかである。

『忘れえぬ人々』は、「彼の全作品に通じ」る「小説創作の方法論」の一端を開示しているが、全体を示していない。『忘れえぬ人々』を序章とする次の仕事で、いかに「それらの人物の内容を具体的に充たす」か、という『忘れえぬ人々』に描かれざるも一つの「小説創作の方法論」があったはずである。それと『忘れえぬ人々』の「方法論」とを総合的に把握すれば、いわゆる「社会小説」や「キリスト教社会主義」の文学とも違った独歩の文学の本質、つまり「社会問題の解明とはちがう角度から『自由』『平等』の認識に進んで(中略)当時の封建道徳や、人物に関する価値評価の基準変換<sup>(9)</sup>」を表出した独歩の独自性・特異性が一層明らかになろう。

第二点は、独歩の小説が短篇形式へ決定づけられたのは「詩精神を貫いた理知の所産で、……生の充足感——瞬間の感動を捉へて書くので、叙述的な長ったらしい描写なぞ、好まな<sup>(10)</sup>」いからだと彼の文学は「永遠をになった一瞬時の人生断面図」だといわれ、事実『忘れえぬ人々』の点景人物はまさに「永遠をになった一瞬時の人生断面図」である。これだけでは、せいぜい「ある時ある

場所における人生の姿を描く「短篇小説」にしかならない。ところが、これは、独歩の小説の「大部分はある時ある場所における人生の姿を描く短篇小説」であるよりも、むしろ人生の時間的経過を辿る「短篇物語」である事実と矛盾する。

以上に提示した二つの問題は、実は不可分で一体的のものである。その解明にはまず、

(1) 大津―独歩が「忘れえぬ」人物を発見した原体験時における人生把握の方式

(2) 大津―独歩の心象世界へ映し出された「忘れえぬ」各人物像の象徴的意味

(3) それを記した大津の「スケッチ」の意味

という三点から『忘れえぬ人々』の世界を分析説明し、最後に、(4) 『忘れえぬ人々』を序章にして、「それらの人物の内容を具体的に充た」し、現実の再構成に至る「イマジネーションとシムパツシー」という、「独歩の小説創作の方法論」の統一原理の全貌を、『欺かざるの記』『予が作品と事実』『病牀録』等に基づいて体系づけねばならない。

## II 人生把握の方式をめぐって

彼は「親とか子とか又は朋友知己其ほか自分の世話になった教師先輩」をすべて「忘れて叶ふまじき人」とし、忘れえぬ人々の

『忘れえぬ人々』の原像とその後の独歩の方法

範圍から除外する。彼のいう「忘れえぬ人々」は、「恩愛の契もなければ義理もない、ほんの赤の他人であって、本来をいふと忘れて了つたところで人情をも義理をも欠かないで、而も終に忘れて了ふことのできない人々」である。

では、なぜ④～⑥の人々だけがその中に選ばれ、彼らと同じ場にはいた無数の男女や秋山は、なぜ選ばれなかったのか。①はその理由を明示していない。その理由を探るには、その前提として、大津(独歩)が「此等のの人々を見」て心象中に映し出すまでの、その状況と主体的行動の方式とを考察する必要がある。

まず、彼が「此等のの人々を見た時」の共通点は、いずれも「旅」の機会を生かしていることである。これは『入郷記』に記された、棲み馴れたる土地に在りては、已に周囲の事物に馴れて人は容易に人生の意味を感獲し得るものにあらず。

という「経験せる事実」を前提にしている。彼にとって常住による「馴れ」は、「事実を視ず(中略) 事実は無感覚」(神の子)な「心靈の麻痺」(牛肉と馬鈴薯)へ人を陥れ、ものの見方考え方を日常の利害や人間関係の狭い枠内に限定づけるものであった。だからその囚われから自己を解放して、もっと新鮮に「事実を直視する」(神の子)主体を回復し、自由な発想転換をはかって日常の人生を見直すための方便として、彼は「旅」をした。そうした「旅」の効用を明示しているのは、⑥の琵琶僧に出会う直前のところである。

僕は全くの旅客で此土地には縁もゆかりも無い身だから、知

る顔もなければ見覚えの禿頭もない。其処で何となく此等の光景が異様な感を起させて、世の様を一段鮮かに眺めるやうな心地がした。

独歩はこれと同様のことを他の作品にも、

利害の念もなければ越方行末の想もなく、恩愛の情もなく憎悪の情もなく、失望もなく希望もなく、ただ空然として眼を開き耳を開いて居る。旅をして(中略)縁もゆかりもない地方を行く時は往々にして此の如き心境に陥るものである。かかる時、はからず目に入った光景は深く心底に彫り込まれて多年これを忘れないものである。(空知川の岸辺)

と書いている。こうして彼は、日常の利害や狭い人間関係の愛憎の枠内でしか物を見、考えることのできない次元を自由に越えうる発想転換の機会として「旅」を生かし、「土地に縁もゆかりも無い身」だからこそ可能な「利害の念もなければ越方行末の想もなく、恩愛の情もなく憎悪の情もなく」無垢の眼で、人生行路の途中にふと出会う人々の人生断面を捉えた。それも、彼らとの間にまだ個人的な利害や恩愛や義理が生じないうちに、出会いの瞬間をとらえて心のカメラに写しとるのである。もし、そこに「知る顔」が見つかれば、たちまち日常の個人的な利害や愛憎の次元へ引き戻されるだろう。「知る顔もなければ見覚えの禿頭もない」からこそ、「世の様を一段鮮かに眺める」ことができるのである。が、これだけではまだ、忘れえぬ人々と同じ場にいた無数の男も含めて「世の様を一段鮮かに眺める」ことはできても、④

④の人々だけを忘れられぬ理由は尽くせない。

忘れえぬ人々は、「周囲の光景の裡」に融合した存在でありながら、それぞれ「個」として捉えられている。つまり、人間を社会的存在として社会の中に見出すと共に、それぞれ独立した「一個人の人間」(欺かざるの記 明27・1・1)として照らし出すのである。

では、彼らを「一個人の人間」として照らし出すことを可能にする前提は何か。まず「自己の生存を自覚する」(神の子)ことだと独歩はいう。そして「自己」を「宇宙に於ける人間一個の生命」(欺かざるの記 明26・10・26)として「自覚する」ことを通して、「他」を自分と同じ「宇宙に於ける人間一個の生命」として認識する。問題は彼がどうしてそれを可能にしたかである。「忘れえぬ人々」の④の、阿蘇登山から下山してあの馬子を見出すくだりを見よう。彼は山上で、

壮といはんか美といはんか惨といはんか、僕等は黙然たまま一言も出さなくて暫時く石像のやうに立て居た。此時天地、悠々の感、人間存在の不思議の念などが心の底から湧て来るのは自然のことだらうと思ふ。(傍線は北野)

という経験を経てあの馬子を見出すのである。これは、「人寰を脱して(中略)無窮幽玄なる自然と面々相接」(欺かざるの記 明26・10・9)して「天地悠々の感、人間存在の不思議の念」に打たれた後、再び元の「人寰に投じ」て日常社会の人生を見直す、という独歩の人生把握の方式を示している。山頂で、彼は遠大な

大観の中に故郷の山を遠望して父母・朋友を想起し、視界に入るすべての地に治乱興亡の歴史があり、無数の人の生死があつて現在に未来に続く事実を思いをはせる。

此に登りて(中略)自然の大を見る毎に人生の不可思議、靈妙を感ず。人類の歴史は幻の如く吾が前に、其最初第一の原始人より最後第一黄金時代の子との間の人類の歴史の縮図精神を示すなり。生死の窮りなき海は眼下に横はるを見よ。(欺かざるの記 明26・11・6)

このように「人寰を脱して」無窮の時空の広がりの中に、自と他を共に「宇宙に於ける人間一個の生命」として捉えた彼は、「人寰に投じた時」も同じ視界から、社会生活を営む「他」を自己と同じ「宇宙に於ける人間一個の生命」として見出す。彼自身が「此吾」を持っているのと同じく、「他」も「凡て其の吾を持」(欺かざるの記 明27・3・6) っている。だから「他」はただの他人でなく「他の吾」なのである。そのように「吾の外、無数の吾ある」(同27・2・25) 中から、彼は「一個の」「他の吾」を見出すのである。

この方式は登山に限らず、旅中で「忽然寂しき田園より人寰に入りたる時」(入郷記)でも同じく可能で、亀屋の主人が忘れえぬ人となりえた一因は、それである。旅による空間の移動は空間の広がりを意識させる。その広がりの中の見知らぬ所に思いがけず見出される人との出会いであればこそ、時空を越えたところに「此吾」と同じ「他の吾」の人生が遍在しているのだという人生

『忘れえぬ人々』の原像とその後の独歩の方法

発見の喜びがあり、その発見の喜びを通して彼らとの連帯感も生じる。だから「凡ての同胞の住む場所々々を彼は遍歴」(潔の半生)するのである。

この経験の集積は、日常の場に居ながらにして「衆人の喋々と共に喋々し、ふと窓外の白雲に眼を転じた時」(神の子)でも、その「白雲」から宇宙空間を意識することにより、同様の発想転換と人生の再発見を可能にした。

こうした原体験を基にして、彼が「独り夜更て燈に向」かつて彼らを「憶ひ起」こす時も、「皆な是れ此生を天の一方地の一角に享けて悠々たる行路を辿り、相携へて無窮の天に帰る者ではないか」と、やはり悠久の時間と空間が彼の心象中に意識されており、その中に「此吾」と同じ「一個の」「他の吾」が忘れえぬ人として映し出されているのである。

### Ⅲ 写しとられた人生断面の象徴的意味

だが、①②③の人々のみが忘れえぬ人々になった決定的要因は、彼らがどんな象徴的存在として彼の心的世界に映ったか、である。

④は春の中頃、大津は「体軀の工合が悪いので暫く保養する氣で東京の学校を退いて」帰郷する途中、瀬戸内通いの船上で「将来の夢を描ては此世に於ける人の身の上のことなどを思ひ」つつ、春霞にかが鳥々を見送るうちに、とある小島に一人の男を見た。

何か頻りに拾っては籠か桶かに入れてあるらしい。二三歩あるいてはしゃがみ、そして何か拾うてゐる。自分は此淋しい島かげの小さな磯を漁<sup>あそ</sup>つてゐる此人をちつと眺めてゐた。船が進むにつれて人影が黒い点のやうになつて了つた、そのうち磯も山も島全体が霞の彼方に消えて了つた。その後今日が日まで殆ど十年の間、僕は何度此島かげの顔も知らない此人を憶ひ起したらう。これが僕の「忘れ得ぬ人々」の一人である。

人物描写は右の引用部分だけで、背後の自然の中の一点景にすぎない。それがなぜ忘れえぬ人になつたのか。まず、背後の大宇宙の中の一小島に点在する個なる人間存在として見出されたこと、次に、「島かげの小さな磯を漁つてゐる」行為そのものが、人の一生の営み、人生の必然を暗示していたからであらう。現に独歩はこの話の原体験を日記に、

寂寞たる小島の海浜にひとり人間あり、定めて彼しこの山かげに見る茅屋の主人なるべし、黙々として何かあさり居たり。余が、眼裏、彼を映じたる一刹那、嗚呼かくしても一生涯は一生涯なりとの感、熱涙と共に突き起る。而も顧みて吾を思ひ、吾及び多くの人々も亦密に考究し来れば、或る無形の一小島に碌々生涯を送る者なる事を感じ、人間は小なる者哉と思ひたり。(明治廿四年日記 5・3)

と書いている。小島の磯を「二三歩あるいてはしゃがみ、そして何か拾うてゐる」一刹那の姿に、独歩は漁夫の「一生涯」の営

みを見た。しかも、それは単なるこの一漁夫の人生営為の姿でなく、人間が生きたために「労働している」姿であり、「吾及び多くの人々」の人生そのものを、人生の本来自然の営みを象徴している姿である。この原体験こそ、ワーズワスを知る前年の独歩が捉えた「永遠をになつた一瞬時の人生断面図」であつた。

それは、独歩らがストライキで訴えた学校改革の要求が通らず、退学し、挫折感をいだいて帰郷する途中(作中には健康を害して帰郷するように虚構化してある)、「将来の夢を描ては此世に於ける人の身の上のことなどを思ひつゞけてゐた」独歩に、人生そのもののあり方に対する根本からの問い直しを迫つた姿として、後々まで脳裏を去らなかつた。

だから彼の垣間見た漁夫の人生は、その漁夫の人生にとどまらず、「吾及び多くの人々」の人生営為の本然的な姿として普遍化され、人の一生とはいかなるものかを暗示する姿として彼の心眼に映つた。あの漁夫は一生あの営みを続けるだろう。同様に人は職業の如何を問わず、広い天地の内なる「或る無形の一小島」に生きて、各自の生業の営みのうちに人生を展開し、生涯を終える。それはあの漁夫の生涯と何の異なるところがあるか。そんな思ひが彼の脳裏に去来したに違いない。

だからこそ「忘れえぬ人々」は、彼が「此世に於ける人の身の上のことなどを思」う時の心象体験を原点にして、無数に書き加えられ、阿蘇の馬子も「歌志内の鮎夫、大連湾頭の青年漁夫、番匠川の瘤ある舟子など」も亀屋の主人も、いずれも一生の生業を

背負った人生を彷彿させているのである。秋山をこれに加えなかったのは、「第一に路傍の人、第二に大自然を背景に黙々と生きている人、第三に山林海浜の小民」という忘れえぬ人々の三つの条件に該当しないからであろう。が、もう一つの大きな要因として、画家の秋山が、絵を画くという彼本来の人生を見せていない点をあげねばなるまい。

その点、㉞の琵琶僧は流浪の世捨人でも生きるため巷に琵琶をひき、一生の生業を背負った人生を感じさせる。それに、この僧と㉝の馬子とは一見、住む世界を異にしながら、共に音曲を発することにより、忘れえぬ人々に選ばれた点が共通している。㉝には、「其俗謡の意と悲壮な声とが甚麼に僕の情を動かしたらう」(傍点は北野)とある。なぜか。

独歩は『欺かざるの記』(明26・5・28)に、「音楽は真に吾を救ふ不思議の力なり、(中略)精神枯れ、靈骸へ、力尽たる時若し此の不思議なる力に触るゝ時は、吾忽然として生く」と書いている。音楽は彼の内なる「死せる思想」に「血を以て充たし」、「凡ての情、泉の如く心」に「溢れ来」たらせ、「知の前に情」を加えて「物を観る」ことを可能にし、抒情の源を甦らせる。そして今まで灰色の平面のように感じられた天地万物を、生氣ある緑の立体に一変させ、彼が「詩人」として「人性自然の幽音悲調を聞」(同26・3・31)くことを可能にする。『忘れえぬ人々』の琵琶僧を見出すくだりを見よう。

忙しさうな巷の光景が此琵琶僧と此琵琶の音とに調和しない

『忘れえぬ人々』の原像とその後の独歩の方法

様で而も何処に深い約束があるやうに感じられた。あの嗚咽する琵琶の音が巷の軒から軒へと漂ふて勇ましげな売声や、かしましい鉄砧の音に雑ざって、別に一道の清泉が濁波の間を潜ぐって流れるやうなのを聞いてみると、嬉しさうな、浮き／＼した、面白ろさうな、忙しさうな顔つきをしてゐる巷の人々の心の底の糸が自然の調をかんでゐるやうに思はれた。

この「巷の人々の心の底の……自然の調」とは、独歩が「詩人の本分」として聞き、かつ表現しようとした「人間胸臆の深底に於て発する幽音悲調」(欺かざるの記 明26・3・31)である。彼は音曲に詩心を触発され、「社会生活の渦中にストラグルする人間の感情、思想より人性自然の幽音悲調を聞」(同)いた。と同時に、その音曲を發した当人の姿に、人生の姿の必然を見た。だから馬子も琵琶僧も、「見た時の周囲の光景」と共にいつまでも「目の底に残」ったのである。

#### IV 「スケッチ」の意味するもの

「忘れえぬ人々」とは、小説全体の題名であると共に、作中の大津の手記の題名でもある。この手記について作者は大津に、「ほんの概要を書き止めて置た」だけの「スケッチと同じことで他人にはわからないのだ」と言わせている。では、大津の手記は一体どの程度のことを記したものと想定すればよいのか。

それは、独歩が詩や小説の題材にすべき人物・状況を「詩料」「物語の料」と名づけて『欺かざるの記』に書いたものや、『欺かざるの記』の記録にはないが後年になって「物語の料」として追認された人物、等々を略記した『詩料』『物語の料』特集のごときもの、と推定できる。現に独歩は、過去の佐伯生活の見聞に基づく「創作メモ」(学習研究社版独歩全集第六巻解題・第九巻参照)を作成している。それは縦書二十六行の和紙赤野原稿用紙に書いたもので「二十八年四月八日」の日付があり、二十一枚中の二枚が現存し、その一部は『不可思議なる大自然』にも、

◎芳島と女島との間の渡守り。

◎女島にて見たる水門を下せし若者。

◎船頭町より木立村の間を渡す舟子。

◎十二段(山名)の山腹にて逢ひし老樵夫。

◎こじき紀州(人名)

と引用されている。『忘れえぬ人々』の大阪の「スケッチ」と称する「半紙十枚ばかりの原稿らしきもの」は、この「創作メモ」のようなものと考えられる。現に『忘れえぬ人々』には「番匠川の溜ある舟子」とあり、これは現存の「創作メモ」に、「芳嶋と女嶋との間の渡守り」「船頭町より木立村の間を渡す舟子」「十二段」よりの帰路、木立より乗りたる舟の船頭」とある三者中の一者に該当する可能性があり、その原拠は『欺かざるの記』(明26・11・4~7)に見出せる。すると、小説『忘れえぬ人々』を書いた当時の独歩は、これと同様のメモを別に用意し、それを大津

の手記として作中に用いたか、またはこの既存の「創作メモ」をモデルにして作中の大津の手記を設定した、とも考えられよう。

「物語の料」「詩料」は、それから物語を導き出し、小説を創作しうる可能性を内蔵した「題材」の覚書であり、『忘れえぬ人々』の(A)~(C)は、それを発見した当時の再現である。それから小説を創作する仕事は、虚構を生む作者の想像力にまたねばならず、そこに『忘れえぬ人々』に書かれざるもう一つの「独歩の小説創作の方法論」があったのである。

#### IV イマジネーションとシムパシー

「詩はイマジネーションとシムパシーとが生む処の子なり」(欺かざるの記 明26・11・8)とは、同時に「独歩の小説創作の方法論」の核心であった。「シムパシー」とは、「小我を離れ、心を此人間同胞の上に馳」(同27・2・25)せ、「凡ての吾に同化する」(同27・4・1)ことである。すなわち、

吾は同時に、農夫たる可し。昔の予言者たる可し。(中略)大なる帝王なる可し。(中略)嗚呼、已に農夫なり。名なくして朽つる何かあらん。已に予言者なり。大なる責任を有す。已に貧民なり。窮乏何かあらん。已に帝王なり。権勢何かあらん。已に少女なり。心雪の如かる可し。嗚呼、吾は、此の吾は、決して一個の小イゴート、一境遇と、一事象の爲めに動かさるゝものならんや。吾は人類なり。国木田哲夫は人類な

り。(同27・2・27)

という、文学創造の根源をなす心的機能である。独歩の「シムパッシー」は単なる同情・共感ではない。その根底には、「神」と「自然」の前には「此吾」も「乞食」も「等しき人間」(同27・1・29)であり、ゆえに「総理大臣の一生と一農夫の一生との研究に差別を置かざる也」(同26・9・7)という一切平等無差別の思想がある。『忘れえぬ人々』に、

我れと他と何の相違があるか、皆な是れ此生を天の一方地の一角に享けて悠々たる行路を辿り、相携へて無窮の天に帰る者ではないか、といふやうな感が心の底から起つて来て我知らず涙が頬をつたうことがある。其時は実に我もなければ他もない、たゞ誰れも彼れも懐かしくつて、忍ばれてくる。

僕は其時ほど心の平穩を感ずることはない、其時ほど自由を感ずることはない、其時ほど名利競争の俗念消えて総ての物に対する同情の念の深い時はない。

とあるのは、一切無差別平等の思念に基づく「シムパッシー」である。その時、『源おぢ』の翁と乞食も、『忘れえぬ人々』の漁夫や馬子らも、『二少女』の電話交換嬢も、『富岡先生』の英雄になり損じた拗ね者も、『少年の悲哀』の娼婦も、『酒中日記』の校長も、『春の島』の白痴児も、『窮死』の変死した労働者も、『竹の木戸』の職人夫婦も、「等しき人間」として「物語の料」に入るのである。

ただし「凡ての人類」といっても、あくどい人物は『酒中日

『忘れえぬ人々』の原像とその後の独歩の方法

記』の母親程度で、それも校長の悲劇構成のために必要悪として登場させた感がある。「シムパッシー」・人間的共感に発した独歩文学は、社会の底辺に生き、底辺を支える「小民」の人間的眞実を暖かく共感をこめて描いた点に、大きな意義があったが、その反面、人間性の内なる悪徳の根源を剔抉しえぬ弱点を背負わねばならなかった。

「物語の料」から小説を創作するには、「イマジネーション」の機能も要する。それは、

彼の小児の時代は如何なりしぞ。彼の親は如何。彼長崎に在る時は如何なりしぞ。彼は何故に帰国せしぞ。而して今は一艘の小舟をこぎて人をわたし以て其生活をつゞけねばならぬに至りたる乎。彼に妻あらざる乎。彼に小児あらざる乎。今あるか、なき乎。彼一生の悲喜哀感は如何。(欺かざるの記 同26・11・7)

と「想像し来」て、その人物の生活状況、人生の経過、性格、思想、心情などを具体的に充たし、再造する心的機能である。独歩は、

余の眼には歴史的事実のみ事実として映ぜざる也。理想も事実なり。想像も事実なり。人間が其の心に働かす事実なり。

(同26・11・9)

と「想像」<sup>イマジネーション</sup>の生む物語的虚構の眞実性を主張し、「想像の馬を駆つて之を追はゞ無数の事実」(同26・11・14)を創造しようという。

だが、後年の独歩の自解によれば、彼の作品は、事実そのままを描いたものも全くの空想からできた作品も共に極少で、大部分は「実際の人物若しくは事件にヒントを得た者」か「事実の人物と事件が其小説の主要部を成せる者」（予が作品と事実）だという。これは、彼が事実以上の真实性にみちた「想高き」作品をめざして事実に変更を加えながらも、それが現実感の伴わぬ空想や妄想到に陥る弊を避けるため、「村落を見ずんば折角の高遠なる詩想も実際の同胞をはなれたる空想に止まん」（同26・12・12）と現実を直視し、現実の「観察」に即して「普通なる人情の上に人生の真理を観出」（同）そうとしたことを示している。独歩の「詩想」はそうした態度に支えられながら、「想像の馬を駆って」時空の制約をのり越え、彼が時と所を違えて見聞した「物語の料」の数々を同一次元に結びつけ、「美しき配合」を想像中に形成した。

老樵夫、老船頭、多くの農夫、皆な美しき配合を吾が想像の裡に形づくる也。（歎かざるの記 明26・11・7）

『忘れえぬ人々』が、「シムパッシー」による「物語の料」の発見時と創作への原衝動を生じた時の再現だとすれば、『忘れえぬ人々』に書かれざる「小説創作の方法」は、実にこの「美しき配合」による現実の再構成とその形象化であった。この方法態度が晩年まで一貫不変だったことは、『予が作品と事実』『病牀録』の自作自解が如実に証明している。

したがって、硯友社の文学にかわって文壇の主流を占めた文学が自然主義から私小説の袋小路へ陥ったのに対し、独歩の文学は

同じく客観的素材に徹しながら、より広い視野からの虚構化を通して自己表現する近代文学の可能性を独自に切り開いた。そして神と自然の前には総理大理想も乞食も「此吾」と「等しき人間」だという、一切無差別平等の発想に立つ彼は、やがて「此吾」と「等しき人間」である「他の吾」の「窮死」を見て、個々の善意の外側にある社会組織の不合理を問題視せざるをえなかった。彼は社会小説やキリスト教社会主義の文学とも違う発想の道筋を行きながら、最後の究極には彼らのめざす所と同じ所に向かって歩き出していたといえよう。

註1) 芦谷信和「独歩『忘れえぬ人々』のテーマについて」（花園大学

研究紀要』第4号、昭48・3）

(2) 山田博光「国木田独歩」（『解釈と鑑賞』第25巻第12号、昭35・10）

(3) 吉江喬松「国木田独歩研究」（昭7新潮社『日本文学講座03明治

時代下編）

(4) 中島健蔵『明治文学全集69国木田独歩集』（昭49筑摩書房）「解

題」

(5) 吉田精一『自然主義の研究』上巻（昭30東京堂）386頁

(6) 清水茂「忘れえぬ人々」（『国文学』第3巻第2号、昭23・2）

(7) 山田博光『日本近代文学大系10国木田独歩集』（昭45角川書店）

44頁補注35

(8) 前掲(2)に同じ

(9) 中島健蔵編『近代文学鑑賞講座(7)国木田独歩』（昭38角川書店）

26頁

(10) 秦一郎「国木田独歩」（『明治大正文学研究』季刊第17号、昭30・

9）

- (11) 福田恆存『作家論(一)』(角川文庫) 19頁  
(12) 工藤好美「国木田独歩」(『名古屋大学文学部研究論集』第1号、  
昭26・3)  
(13) 芦谷信和「独歩『忘れえぬ人々』」(『花園大学国文学論究』創刊

号、昭48・10)  
(14) 前掲(7)の15頁補注38

(独歩の引用原文は学習研究社版全集による。)